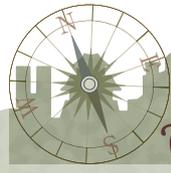


December
号外
2019

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

vol.12 Document



発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング
問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当:CEL弘本)
ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーこーろ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

今回のフォーラムでは、過去と未来の結節点・未来を揺籃する場の役割を担い、世紀を駆けて数多くの博覧会が開催されてきた大阪・上町台地を視点場に、その軌跡から2025年開催予定の大阪・関西万博とその後の百年を見はるかす、再起動すべきものは何なのか、都市と博覧会の世紀のレビューにチャレンジしました。

第1幕では、映像資料を用いて、1900年パリ万博の衝撃を追体験。都市が舞台となる1903年第五回内国勧業博覧会を経て、1925年の「大大阪」へ。そして激しい戦災と復興。引き続き第2幕にかけて、都市戦略としての博覧会の過去を読み解き、2025年からその後の百年へ、都市と博覧会を再定義する未来へとつなぐ、映像とトークで、新たな眺望と知を共有する場となりました。



▲壁新聞
「上町台地 今昔タイムズ」
第12号 (1面)

「上町台地 今昔タイムズ」*第12号では、「上町台地から見はるかす 博覧会「百年の計」で築いた大阪とは」をテーマに、博覧会の百年と社会と都市の激しい変遷の相関を、博物館・図書館に所蔵されている貴重な資料と、当時を知る方の証言、大阪市史や人文地理学や都市文化に精通した識者の鋭い読み解きから、未来に向けて一望する機会としました。

*プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」 「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

1900年パリ万博、熱気球から見たパリ、大観覧車のコラーージュ (国立国会図書館デジタルコレクション)

1903 (明治36)
第五回
内国勧業博覧会開催

築港大棧橋供用開始
花園橋～築港間に
市電が開通

1923 (大正12)
関東大震災起こる

1925 (大正14)
大阪市第2次市域拡張
大大阪記念博覧会
開催

1948 (昭和23)
復興大博覧会開催

1949 (昭和24)
大阪市立大学開学

1964 (昭和39)
新大阪～東京間に
新幹線開通

1965 (昭和40)
阪神高速道路
大阪1号線が開通

1970 (昭和45)
日本万国博覧会開催

第12回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。 映像&トーク 1900年パリ万博から、大阪・関西万博後の百年へ 上町台地を視点場に、 都市と博覧会の世紀をレビューする



- 日時: 2019年9月28日(土) 14:00 ~ 17:15
- 場所: 大阪ガス実験集合住宅 NEXT21
2階ホール (大阪市天王寺区清水谷町6-16)
- 主催: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング
協力: ナレッジキャピタル 大阪・関西万博会議～ワイガヤサロン～
- プログラム:
第1幕 レビュー・ムービー&スライドショー
(大阪ガスCEL/U-CoRoプロジェクト・ワーキング)
第2幕 レビュー・トーク その1
講師 古川武志 (大阪市史料調査会 調査員)
第3幕 レビュー・トーク その2
コメンテーター
山蔦栄太郎 (大阪大学大学院 工学研究科 機械工学専攻 博士課程)
古川武志 (前掲)
モデレーター
池永寛明 (ナレッジキャピタル 大阪・関西万博会議～ワイガヤサロン～座長、
大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問) (順不同、敬称略)

1900 第五回パリ万国博覧会



第五回パリ万国博覧会 ※2

第五回の万国博覧会は、1900 (明治33) 年にフランスのパリで開催されました。世紀の変わり目にあたり、新しい20世紀への展望を示す博覧会。世界各地からおよそ4700万人が来場しました。

この万博では、新しい都市インフラを構築する、電氣的な設備・施設が話題となりました。例えば、会場内を走る「電車」に「動く歩道」、また1889年の第4回万博で建設されたエッフェル塔には新たに「エスカ



当時の記録映像に残るパリ万博 (YouTube 等で閲覧可)

レーター」が設置されました。夜間も会場は華やかなイルミネーションに彩られ、人々を魅了しました。そこには衝撃的な近未来都市の姿がありました。

このパリ万博は「映像の20世紀」のまさに前夜の開催。会場ではリュミエールの映



(左) 万博会場を結ぶ電車、(右) 動く歩道 ※2

画上映が行われ、博覧会の記録映像も複数撮影されて、今も残されています。

アミューズメントの世界も新しい展開を見せています。例えば、モダンダンスのパイオニアと言われるロイ・フラーは、このパリ万博の電気宮で、照明技術を駆使した幻想的なパフォーマンスを披露、大人気を呼びました。ちなみに、ロイ・フラーはこの時、世界巡演中の川上音二郎一座を舞台に招き、パリに貞奴ブームを生み出しました。このほかにも、パリ万博には多数の日本人が訪れ、新しい都市文明の姿を目の当たりにして、大きな衝撃を与えられました。

第1幕 レビュー・ムービー & スライドショー

映像資料を用いて、1900年パリ万博の衝撃を追体験。都市が舞台となる1903年第五回内国勸業博覧会を経て、1925年の「大大阪」へ。そして激しい戦災と復興への歩みをレビューしました。

1900年～1948年 タイムトラベル

構成：大阪ガス CEL/U-CoRo プロジェクト・ワーキング (CEL 弘本由香里、B-train 橋本護)



1903 第五回内国勸業博覧会



第五回内国勸業博覧会の会場正門 ※1

パリ万博の3年後、1903 (明治36) 年に大阪で第五回内国勸業博覧会が開催されます。会場は、天王寺今宮 (現在の新世界・天王寺公園辺り) と堺の大浜で、入場者数は435万人を越える国内では最大規模のものとなりました。

会場には西洋風建物が立ち並びました。正門を入ると庭園風の大通路が広がり、その奥に美術館と望遠楼 (大林高塔) が



第五回内国博覧会の記念絵葉書 (大阪駅と大阪築港) ※1



大林高塔から見た第五回内国勸業博覧会会場 ※1

聳えます。一見してパリ万博の影響を強く受けているのがわかります。

その一方で、噴水の観音像など、日本文化を感じさせるモチーフも随所に見られ、近接する四天王寺では、むしろ科学万能に警鐘を鳴らすかのように、聖徳太子千三百年御聖忌に合わせ、世界最大級の大釣鐘もつくられました。

この博覧会では、会場案内図や観光案内、絵葉書など、関連の発行者が多数出されたのも特徴的です。

記念絵葉書には博覧会場だけでなく

海の玄関口として整備中の大阪築港や大阪駅、大阪城なども紹介されました。

会場建設を請け負った大林組の望遠楼 (電動エレベーター付き) など、近代的な高層建造物も登場。塔の展望台からは会場に広がる展示館群やその先に広がる大阪市街を俯瞰できました。

人気をよんだ展示館の数々には全国および世界各地から数多の文物が展示されました。参考館にはイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアなど十数か国が出品し

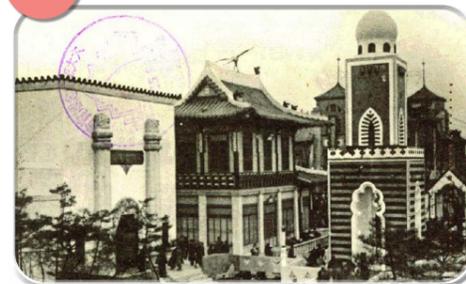
たほか、カナダや欧米の商社が特設館を出展し、この内国博は、万国博の趣を有するものとなりました。

冷蔵庫館には連日大勢の人が並んで入場。蒸気自動車も展示され、会場内の

走行もしました。会場脇を鉄道が走り、臨時停車場も設置。また、パリ万博に倣って設置された会場のイルミネーションの輝きが訪れた人々の目を驚かせ、未来の都市生活を予感させました。

不思議館では、パリ万博のロイ・フラーを模した、カーマンセラ嬢の「電気の舞」が大人気。このほか、ウォーターシュート、サーカス、動物園などの余興的施設が設けられて人気を集めました。

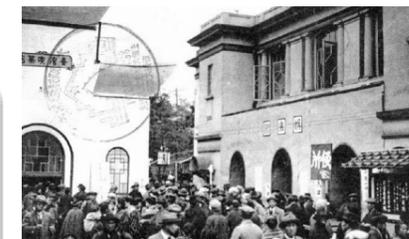
1925 大大阪記念博覧会



右から 暁鐘塔、朝鮮館、満蒙館 ※1

22年後の1925 (大正14) 年4月1日、大阪市は第二次市域拡張により人口が139万人から203万人に増加。人口で東京市を抜いて日本一になりました。世界でもニューヨーク、ロンドン、ベルリン、シカゴ、パリに次ぐ第6位になり、「大大阪」の時代がやってきます。

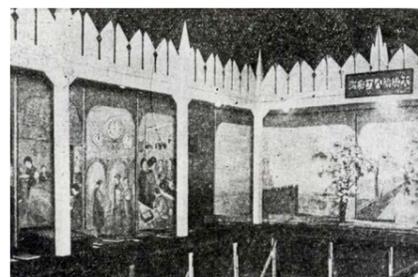
これに合わせて、大大阪記念博覧会は同年3月15日から4月30日まで、天王寺公園と大阪城を会場に開催されました。「大



右から 娯楽館と台湾館 ※1

大阪の実現と、毎日新聞1万5千号を祝賀して同社が主催。約180万人の来場者を記録しました。

天王寺会場の本館では、大阪市街の精巧な大パノラマを展示し、各専門委員による大阪に関する27テーマの「二十大大阪」



27テーマのうち「女の大阪」展示 ※3

の展示が展開されました。

参考館の展示には、大大阪俯瞰図とともに現代都市改造の各種資料と、編入町村の実情を図示。大大阪の都市改造の指針が示されています。

また、娯楽館での余興や野外奏楽堂での演奏、「子供デー」や「大大阪デー」といった日々の催し物も来場者の人気を呼びました。

大阪城の天守跡には「豊公館」を建設しました。こちらの会場にも70万人以上が来訪。こののち市民の間で天守閣再建の機運が高まってきたと言います。



大阪城天守跡に建てられた豊公館の夜景 ※1

1948 復興大博覧会



復興大博覧会の会場正門 ※4

1941 (昭和16) 年、日米開戦し、戦争末期の1944年12月から翌年8月にかけて、大阪府内で約50回、米軍の空襲を受けました。最も被害が大きかったのは1945年3月13日から14日未明の大空襲で、約4千人が死亡し、約50万人が被災。大阪市街は焦土と化しました。

その戦災地を舞台に、終戦後の1948 (昭和23) 年、毎日新聞社の主催による復興大



人気を呼んだテレビジョンの展示 ※4

博覧会が、天王寺区上本町8丁目付近で開催されます。一面の焼野原に、展示館、野外劇場等を建設。娯楽の乏しいこの時代に、入場者総数が百数十万人にも及び、大盛況となりました。

見どころは、記念館で展示されたテレビジョン。また、外国館にはPX (進駐軍売店) 特別出品があり、観光館では、アメリカの天然色映画が上映されました。

入場券は福引付きで、野外劇場の催しでは、漫才・浪曲などのほか歌謡ショーやのど自慢大会も催され、子どもの遊具

が並ぶ「子供の楽園」やサーカスなども人気だったそうです。

博覧会後の跡地利用も、あらかじめ計画されており、いくつかの展示館は、市立文化会館や郵便局など、恒久的な施設として活用されました。大阪府も博覧会の建造物を買収し、この地域で「夕陽丘母子の街」の計画を推進。京都館・印刷文化館が「モデル母子寮」に、他の展示館が「各種婦人相談所」「モデル保健所」「家庭生活科学館」「婦人公職補導所」へと生まれ変わり、その遺産のいくつかは現在も残されています。



現在のフレオ大阪 (復興大博覧会の観光館から、市立文化会館 → 婦人会館 → フレオ大阪と変遷)

第2幕 レビュー・トーク

時代により都市の役割も変わります。人が住んでいるところが都市だという近世的な捉え方から、都市はエリアであるという考え方への変化。市域拡張後の都市形成に向け、半歩先の未来はどうあるべきかを人々に目の当たりにさせることも博覧会の目的でした。



「大大阪」へのグランドデザインと、 都市戦略としての博覧会の 過去を読み解く

古川 武志 (大阪市史料調査会 調査員)

ふるかわ・たけし 専門は近現代史。大阪の近代史料の調査を実施し、特に大阪の大衆文化に詳しい。共著に『モダン道頓堀探検』、論文に『洋楽の展開と道頓堀ジャズ』、『戎橋筋商店街百周年一画像に見る戎橋、戎橋筋』など。

行われるようになった。今につながる物語が生まれ、京都の人は今も結構それを知っているわけです。

結局、第四回の誘致で京都に負けた大阪は、次回は必ずやりたいと、京都に事前に一筆入れてもらったことで、第五回は大阪にほぼ確定したわけです。当時は、日清戦争が終わり、日露戦争に至る直前の時代でした。

それ以前、1889(明治22)年に、大阪市は市町村制に基づいて初めて誕生します。当時は市制特例があり、東京市でもそうですが、大阪市長は大阪府知事の兼務でした。つまり大阪府がすべてを握っていたわけです。市庁舎も府庁舎の横にあったし、大阪府が、いわば直属で大阪市を管理している。ほぼ10年間にわたってそうだったのが、1897(明治30)年に市制特例はおわり、大阪府が大阪府から独立します。第五回の内国博は、そんな時期に計画されました。

近代以前、都市の基盤は住人

では、それまでの都市はどういうものだったのかという問題があります。

古い大阪地図を見ると、道路があって、周囲に家がずっと密集して並んでいる部分があります。色をつけて区別していることも多い。この時代、都市とは何かというと、人が住んでいるところでした。つまり、家が並んでないところは都市ではないわけです。かつては、都市とは税金を取る

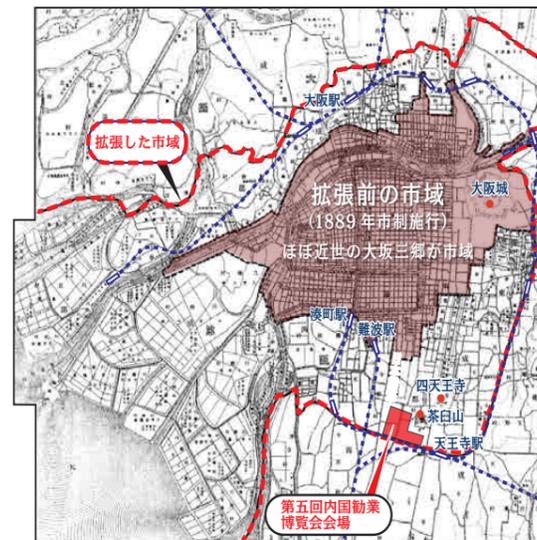
ところだったから、人が住んでいて、そこで生活していることが重要だったわけです。だから、ただ道が続いているだけのところは都市ではない。なぜなら、そこからは税金が取れないから。

例えば、江戸時代の大坂のまちである大坂三郷の面積どれくらいかという、実はよくはわからない。人が何人住んでいるのかは、当時の宗門改帳などである程度わかります。ところが、都市域、エリアという考え方自体がありませんので、面積についてはだいたいこれくらいとしか言えないわけです。

ところが、明治時代に大阪市が大阪府から独立するときに、当時の地図にあるように市域の境界線が生まれました。このとき、大阪市が決めた条例などが適用される範囲というものが必要になってくるので、大阪市というひとつのエリアを形成しないとイケないということになるわけです。

こうして、人が住んでないけれども都市だという部分が出てきます。例えば大阪駅。ここは大阪の玄関口ですが、それまでは北野村でした。造幣局は川崎村です。ここも人はあまり住んでいない場所。でも、近代的な都市の中では必要な地域でした。築港もそうで、港というのが、近代的都市に必要なだからこそ、これも市域に取り込んでいき、有機的に連携させようとしたわけです。

結局、近代になってくると、都市というのがエリアとして存在して、そのなかで都



1897(明治30)年に大阪市は近代的産業都市としての空間的広がりを求め周辺の町村を編入。市域は3.7倍に拡大しました。

市をいかにしてつくっていくのかが重要になってきます。ある意味で計画的に大阪市域というものを形成していく。それが、1897(明治30)年の第1次市域拡張につながっていくことになります。

人が単位で、そこに何人住んでいるのかが重要だったのが、今度は、都市というものを機能の面からまず範囲を決めて、そのなかでどうつくっていくかということが大事になってきます。そういう状況のなかで第五回内国勸業博覧会が大阪にやってくるわけです。

当時、今宮村と言われていたところに博覧会の会場をもっていきますが、それ以降、その地は、大阪という都市のアミューズメント、人々が憩う場所、そういうエリアとして形づくられていくわけです。そういう流れ



第五回内国勸業博覧会の跡地の西半分は新世界になり、ルナパークが開場。中央には通天閣が建てられた(大阪府立図書館デジタルアーカイブ)

の中で同地は第五回内国勸業博覧会の会場になり、そのあと、新世界や天王寺公園につながっていく。まさに、長いスパンの都市づくりのなかで、この地の現在が形成されていったのだということがわかります。

第五回内国博が示したの は近未来の都市の姿

第五回内国勸業博覧会は、戦前では大阪最大の博覧会でした。その次が、大大阪記念博覧会。この2大博覧会を考えると、大阪市というものが、大きな岐路に立たされているときに開催されていることに

気づきます。博覧会とは、それ以降、どういう都市をつくっていくのかということを示すものでもありました。

1900年のパリ万博では、20世紀の始まりに向け、近未来型の都市というものはこういうものだというのが示されました。人が歩かなくても、歩道が動く。エリアとエリアを電車が結ぶのは、公共交通機関の考え方。博覧会の会場の中で、10年後、20年後の都市の姿を具体的に見せました。

第五回内国勸業博覧会でも同様に、ひとつはこれからの都市は電気というものを中心に発達すべきであるということを示しました。

大阪でも、それ以前から、大阪電燈会社というのがありました。分かりやすく言うと電燈を売る会社。この会社は、購入者と電気の契約を結びますが、電燈は、発電した電気を電線で送ってはいじめてつくわけです。都市のインフラとして電気の重要性が知られてくるのはこの時期からでした。

文明開化したといっても、かつての大阪の夜はまだ暗く、誰も出歩かない。



第五回内国勸業博覧会では夜間開場が行われ、建物はイルミネーションに彩られた(大阪府立図書館デジタルアーカイブ)

ところが、電気を使うことで、都市民は、明るい夜を手に入れることになるわけです。会場のイルミネーションと夜間開場は、第五回内国勸業博覧会が日本で最初のことでした。これは明るくきれいというだけでなく、これからの都市は、夜もこんなに美しいということを人々に具体的に示すものとなりました。

結局、大阪市はのちに大阪電燈会社を買収し、大阪市電気局として、発電もして電気を供給し始めます。当時、何がもっとも電気を使うのかというと市電事業でした。さらにのちに、国の指導により、大電力会社は民間でということで、大阪市は電気事業を手放して関西電力になっていき、市の電気局は交通局になるわけです。

もうひとつは、アミューズメントということ。例えば、会場でもひととき目立ったのが大林組が建てた高塔で、展望台にはエレベーターで上がりました。これはおそらく、初代通天閣のモチーフにもなったでしょう。ちなみに、岡本太郎の父親の岡本一平が、大大阪の時代に大阪に来て綴った随筆の中で、彼は通天閣をエッフェル塔と書きました。非常にフランスを意識されていたことがわかります。新世界はアメリカの遊園地コニーアイランドをモデルにしていたとよく言われますが、実はパリの影響が大きい。さらに、博覧会場では、中央に大きな道路を抜くとか、真ん中に緑地帯をつくるというようなことも、当時としては斬新な考え方でした。このようにして、新しい都市とはこういうものだということを示すのが、やはり博覧会のひとつの役割だったのだと言えるでしょう。

新しい時代の都市観光の かたちも提示

もうひとつ、第1幕でも紹介されていましたが、絵葉書の登場があります。博覧会の会期中に内外からその都市に集まってくる人が旅先で購入して、記念にしたり知人に送ったりする絵葉書は、実は、この時期からお土産のコンテンツとして成立してきます。

例えば、一枚の紙にミシン線が2本入っていて三つで一組というのがあります。実



1925（大正14）年の大阪市第2次市域拡張により、旧市域には従来の東西南北の4区のほかに新たに天王寺、浪速、港、此花の4区を、また新市域には西成、西淀川、東淀川、東成、住吉の5区を設置し13区となった。

は、この構成は錦絵と同じ。錦絵は三枚一組で、その系譜を引くものとして、絵葉書が登場しました。

また、博覧会には全国府県から売店が集まって販売を競いあいます。こうして、各地の物産を集めてきて、博覧会に来た人が土産として買って帰るといった文化が作り上げられていきました。つまり、都市の観光のかたちをこうした博覧会が大きく変化させたわけです。これらは、アミューズメント的でもあるし、産業的でもあるわけです。

第五回内国博が開催されたのは20世紀のはじまりの頃。まさに社会全体が前近代から近代に移行する時期で、国勢も右肩上りの段階。発展していく都市というものの象徴として、大阪のなかで形成されてきたものが大きく開花した博覧会だったとも言えそうです。

どのような都市をつくるのか 都市の課題解決に向けて

1897（明治30）年の第一次市域拡張により生まれた東西南北の4区。年配の方は、この4区、あるいは環状線の内側が本来の大阪だと言います。

それが1925（大正14）年に「大大阪」というものになります。まず、都市としてエリアが形成されたところから、これからの都市をどう形成していくのかに課題が変化していきます。ここで大阪市長の関一は、右肩上がり発展していく都市にいろん

な問題が起こってくることに、いかに対応するかを考えました。

当時の大阪は、空には工場の煙突から出た煤煙がもくもく。都市の環境は悪化していました。また貧富の差がひろがり、金持ちは郊外に移り住む。結局、都市は汚くて、不衛生で、ゴミゴミしているようになってくる。こうして、環境的に住みやすく健康的な都市を形成していくのが、都市の次の目標だという考えが出てくるわけです。そのためには、市域を拡大し、その部分を都市化することによって課題解決を目指すものです。

例えば、市域を工業地と居住地と商業地に分け、それぞれを地下鉄、市電、道路でつなぐなどして、新たに形成されるべき都市、健康的な健全な都市「大大阪」を構想する。

そして今度は、大大阪記念博覧会で、その姿を具体的に示そうというわけです。都市には問題がある、その問題を解決するために、諸課題をまず明らかにする。大大阪博では、大阪の現状と未来の課題を取り上げて紹介しようと試みますが、その項目は27にも及びました。「水の大阪」「食料の大阪」「文芸の大阪」…。それをいろいろな専門家たちに担当してもらった。その内容は非常に学問的なもので、ちょっと堅苦しいくらい。大阪という都市はどうあるべきかと、そういう博覧会になりました。

非常に盛況で収益も出ました。その余剰金が大阪市に寄付されて、都市問題の解決を目指す大阪都市協会の基金となりました。

そういう諸相の中で大大阪博が行われたように、それぞれの博覧会は、その都市が持っているその時代の課題に対応するものとも言えるでしょう。

第2次市域拡張により大大阪が誕生しますが、当時は、内務省のお役人がゴーと言わないと市町村合併はできないわけです。大阪にやってきた内務省の地方局長が市域拡張計画を聞き、合併予定の村を遠望して、「一望千里、五穀豊穰」と言ったそうです。見渡す限り田んぼや畑だけじゃないか。こんなところを市域に加えてどうするつもりかと。これに対して、関一たちが言

うのは、これをどのように都市にしていけるかが、むしろ大阪市のこれからの課題だと。周辺地域の人も、島之内の人も船場の人もみんな大阪市民なのですよと。

年配の人は、大阪城は市民の寄付で再建したとよく言います。ところが、大阪はお金が全然ないので、寄付を募ったわけではないのです。大阪市が建てた第四師団司令部の建物の方がお金かかっている。つまり、あなた方は大阪の市民ですよ、その人たちがお金を出し合って、大阪市のためにいろんなものを負担していくという、自分たちの自覚をしっかりとってくださいねと。市民的自覚をうながしたわけです。

戦災復興の博覧会と21世紀を展望した70年大阪万博

最後に、復興大博覧会。戦災で焼け野原になった地域をどんなまちに再建していくのがテーマ。博覧会に子どもの頃に実際行ったことがある方の話では、歌手の藤山一郎が来ていて一緒に歌ったとか、楽しい思い出が語られます。

第1幕であったように、実は、この復興博を一つのモデルにして、都市をどうつくっていくのかの試みもなされています。それらのうちで、都市の遺産として、現在でも残されているものがちゃんとある。今につながっているわけです。

70年の大阪万博は「人類の進歩と調和」をテーマにして、次の21世紀を展望するものでした。では2025年の博覧会では、どういったものが出てくるのか。やはり、我々人類にとって、次の時代の都市がどうつくられていくべきかを指し示すものになるはずで、一方で、娯乐的であり、一方で学問的かもしれない。どうなっていくのかを決定づけるのは、きっと我々の眼差しでしょう。だから、自分の問題として考えていくことが大切。

今回、2025年万博の一つのテーマとして「健康」が上がっていますが、これは確かに重要課題。世界からいろいろな人が大阪に集まってくる時代ですが、そういう人たちを含めた都市のあり方が、次の時代に問われているからこそ、ここ大阪に万国博覧会がやって来るのではないかと、そんな気がしています。



第3幕 レビュー・トーク その2

都市戦略としての博覧会の過去を読み解きながら、2025年からその後の百年へと思いを馳せる…。都市と博覧会の再定義を試みるとともに、いかにして未来へ、次世代へとつないでいくのかについて、会場の方々とともに語り合いました。

コメンテーター：古川武志（大阪市史料調査会 調査員）
山蔦栄太郎（大阪大学大学院 工学研究科 機械工学専攻 博士課程）
モデレーター：池永寛明（ナレッジキャピタル 大阪・関西万博会議～ワイガヤサロン～座長、大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問）



2025年大阪・関西万博とその後の百年に向けて、都市と博覧会を再定義する

※ナレッジキャピタルは、大阪梅田のグランフロント大阪・北館内に設けられた「知的創造・交流の場」。企業人、研究者、クリエイター、一般生活者といった多彩な人々が行き交い、それぞれの知を結び合わせて新しい価値を生み出している。



池永寛明

いけなが・ひろあき ナレッジキャピタル 大阪・関西万博会議～ワイガヤサロン～座長、大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問。過去と現在、内と外をつなぎ、都市・地域の本質（コード）をさぐりだし、方法論（モード）を導きだし、これからの日本のあり方を考え実践していくルネッセ（再起動）を展開。共著に「上方生活文化堂」ほか。

動を与えつつけている。—。こういうものこそが、レガシーなのだと思います。

第2期は第2次世界大戦までの1925～39年。第2次世界大戦前のこの時期の万博は、いわば「芸術の博覧会」でした。写真技術やニュース映画が普及したことで、「技術と珍品」では集客できなくなり、「芸術」をメインにした万国博覧会として甦りました。1925年パリは「芸術万国博」。1933年シカゴは「アールデコ」。1939年ニューヨークは「デザイン博覧会」。1942年ローマ（中止）は「大芸術祭」を標榜しました。

戦後は、世界中でテレビがめざましく普及します。この状況を見て、世界的社会情報学者のマクルーハンは「テレビの普及で集人型の情報メディアの博覧会は時代遅れとなる。そして都市は崩れて村にかえる」と言いました。しかし、マクルーハンのこの見通しは、実際は大きく外れることになりました。

まず、万国博って、なんだろう？

池永寛明 2025年の大阪・関西万博とその後の百年に向けて都市と博覧会を再定義する。こういうことを試みたいと思います。

まず、京都の平安神宮はいつごろ建ったと思いますかと聞いたかたのですが、これは古川さんが話をされてしまった（笑）。1895（明治28）年に開催された第四回内国勸業博覧会のメイン会場として建立されたものです。この博覧会開催を契機の一つにして、京都は現在、世界有数の観光都市となるまでに至りました。京都は、首都の東京移転で始まった、衰退の危機を乗り越えるために、都市戦略をたてて実行してきたのだと言えます。

次に、この頃よく聞く「レガシー」という言葉、私にはどうも引っかかります。最近、ポジティブな見方も入っているようですが、ラテン語 lego「過去から伝えられたもの」が語源で、精神的・物理的遺産ではあるが、時代遅れなものを意味する言葉でもあるそうです。

現代を生きる私たちのスタンスは、過去にあったことを懐かしがったり、美化したりして、過去にとどまってしまうがちです。しかし、実際に何をしたのか、どんなものだったかという事柄でなく、そのとき、そこで何をしようとしていたのかという「想い」や「願い」をつかまないと、いけな。コンテンツ（事柄）だけでなく、コンテクスト（文脈・背景）をおささなければならぬと考えています。

大阪の上町台地で開催された博覧会について、「こんなことがあったのか」「すごいな」という発見や驚き、「今と一緒に」といった共感もあったかと思えます。しかしなぜそれをしたのか、実際にどうだったのかということについて、今まで総括していないことが多い。

4期に分かれる万国博の歴史

議論の前に、万国博の歴史を振り返ってみると、4期に分けて考えることができます。

第1期は1851～1915年。この時期は、いわば「技術と珍品」の万国博覧会でした。1851年ロンドンでは、巨大ガラスドームの水晶宮が注目を集めました。1855年フィラデルフィアでは、エレベーターと拳銃製造。1889年パリでエッフェル塔が登場。1915年ニューヨークでは自動車大量生産工場などが、来場者の目を引きました。

産業革命をトリガーに、新しく発見された技術によって生まれた製品や巨大構造物を見せ、世界の珍しいものを展示したわけです。また、日本の浮世絵や有田焼などが万博に出展されて、ヨーロッパで、「ジャポニカブーム」が巻き起こります。一昨年、デンマークのデザインミュージアムで「LEARNING FROM JAPAN」というイベントが開催されました。デンマークは、100年間日本から学びつつしてきた文化の流れを体系的に紹介されていました。日本文化のデンマークへの広がりや伝え、多くの人に感

次の第3期は、1958～2010年。1970年の大阪万博は、来場予想の3倍の万博史上最大の6422万人となりました。2010年の上海万博がその記録を塗り替えるまで史上最高の来場者数でした。

この頃の万国博覧会のテーマも時代相を反映しながら変遷しています。1958年ブリュッセルは「科学文明とヒューマニズム」。1967年モントリオールは「人間とその世界」。1970年大阪は「人類の進歩と調和」。1992年セビリアは「発見の時代」。2000年ハノーヴァーは「人間・自然・技術」。2010年上海は「より良い都市・より良い生活」。この時期になると、「芸術の博覧会」から今度は「人間の博覧会」として巨大化していきました。

さらに2015年以降の第4期は、情報通信革命が社会を大きく変えつつあるなか、AIとかIoTが盛んに言われるようになります。同時に、万博はほんとうに必要なのかという議論も出てきます。

2015年ミラノ「地球を養う。命のためのエネルギー」。2020年ドバイ「心をつなぎ、未来を創る」。そして、2025年大阪・関西は「いのち輝く未来社会のデザイン」です。ここでは、何を未来に向けて発信するかが重要になってくるでしょう。

万国博覧会のコンセプトも時代にそって変遷

万国博覧会には毎回テーマがありますが、わりと抽象的でよくわからない。「万博で、何のために、何を見せ、何を訴えるのか」という未来社会を見据えたコンセプトが共有されるべきでしょう。

例えば、1967年のモントリオール博覧会のテーマは「われわれの環境」でしたが、実はコンセプトは「カナダ」。カナダとしてのアイデンティティを再定義しなおし、世界に主張しようというものでした。

1970年の大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」でしたが、そのコンセプト

は「近代工業社会」。ちょうど明治100年の頃で日本が封建社会・農業社会を乗り越えて、世界的な近代工業社会になったことを世界に示そうというものでした。1975年の沖縄海洋博のテーマは「海 — その望ましい未来」で、本当のコンセプトは「沖縄の観光開発」。沖縄を美しい海の観光地として再定義し、自立した経済圏とすることで、人口を増やそうというものでした。

同様に、ここまでで取り上げてきた、第五回内国勲業博覧会、大大阪記念博覧会、復興大博覧会にも、それぞれの時代・社会を背景にしたコンセプトがありました。博覧会は期間限定のイベントですが、中長期的な都市・産業戦略の一環でもあります。現在および明日の時代・社会の姿を読み、こんな都市、産業、暮らしてありたいという姿を描き、また、「あれがあるから博覧会に行きたい」というものだったのだと言えるでしょう。 

■あなたにとって、都市と博覧会とは？

万国博を近未来の都市のあり方を考える場に

池永 古川さん、あらためてお訊きします。万国博覧会って何でしょうか？

古川武志 今まさに大阪なら大阪、日本なら日本が抱えている問題について、どういふ解決策があるのかを考える機会と場を与えてくれるものです。簡単には解決されないかもしれませんが、それも含めて提起していく。2025年であるなら、海外から常に大勢の人が入ってくる都市で、例えばどういふ医療体制をとっていくのかなどをそれを通して具体的に考える場であるべきでしょう。

その意味で博覧会はこれからもなくならないと思います。さまざまな人類の課題を再確認しながら考えていく場が博覧会。万国と言うと、国が単位。だったら、これからは人が単位の人類博覧会になっていくのかも知れませんね。

池永 堺屋太一さんが書かれたものに、復興博覧会のことが出てきます。小学生

の時に見て、非常に興奮したと。それが70年万博につながっていったと言います。

古川 その復興博をつくった側の人の資料があるのですが、それを見ると、当時の関係者たちの思いがすごく詰まっているのがわかります。終戦という大きな画期の中で、どのように復興大阪のグランドデザインを描くのか。そこには、高い理想があった一方で、アミューズメント、娯楽に飢えていた人々の欲求にも応える。根底に流れる理念は確かにあるけれど、多くの人にはもう少しわかりやすい、娯楽の部分を覚えていかなければなりません。

池永 ちなみに、復興博覧会に行かれたことがある方がいらっしゃいます。

吉岡武 まだ子どもだったので、個別のことはよく覚えていないのですが、非常に楽しかった。そういう大きなイベントが全然ない時代だったので。

池永 私の父も、行ったそうですが、全く覚えてないそうです(笑)。

では、山蔦さん、若者として、万国博覧会をどう思いますか？



山蔦 栄太郎

やまつた・えいたろう 大阪大学大学院 工学研究科 機械工学専攻 博士課程。日本学術振興会特別研究員 DC 1。生命機械融合領域で機械工学分野のバイオ応用研究を行う。ヘルスケアスタートアップ Remohab の立ち上げをサポート。盲ろう者のためのIoTデバイス「ゆびとん」開発に携わる。

山蔦栄太郎 やはり、考える場を提供するもの。それも、若者対高齢者ではなく、年齢に関係なくそうでしょう。とは言っても、若者にはチャンスかなとも思います。私自身、高校の部活は写真部で、上海に日本代表で学生交流のために一週間ほど滞在したことがあります。ちょうど上海万博の前年のことで、まちは古い建物を壊し、新しいものをつくっていくという活気

に満ちているように見えました。新しい文化、新しい意識改革が進んでいくところを目の当たりにして、万博というのはすごい力を持っているのだなと素直に思いました。一方、日本社会は、長い経済的停滞が言われ、しかも社会を貫く慣性力が強く、そこに若者が少々ぶつかっても方向が変わらないようにも見えます。もう一度立ち止まって、大阪、関西、日本、地球はこのままでいいのかと、年齢、男女の別も関係なく、国籍、宗教も関係なく、ゼロから考える場に万博がなっていけば良いと思います。

池永 周囲の学生さんなどは、万博について、どう言っていますか？

山蔦 大阪大学の中では、それぞれのプロジェクトでどういふ提案ができるかと、教授とディスカッションをしている学生もいますが、特に意識はしていない学生も多いようです。

池永 私もある大学で講義をした際に、万博について尋ねたところ、かなりポジティブに捉えている人が多いようでした。「万博って何？」という人もいますが、意外と期待感もある様子です。

古川 今は、SNSに上げたら個人でも世界に配信できる時代。そういうことから、万博不要論を支持する考えもわかりますが、そういう時代だからこそ、国籍とか性別とかエリアとか宗教とかには関係なしに、チャレンジできるはず。規制の枠組みがボーダーレスになっていくとしたら、そういうものを取っ払った時にどういふものが主張されてくるのかに問われているのではないのかも言えそうですね。発明だとか工業製品であっていいし、発想でもいい。そういうものが、博覧会という場を通じて全世界に発信できる。万博という、多種多様な、包容力のある場の中で表現されるわけです。

山蔦 先ほどマクルーハンの話がありましたが、音楽業界では、ネット等で配信されるようになり、CDが売れなくなっている一方で、実際に会場に観に行くライブの売り上げが増えています。いろいろな情報が手に入る時代だからこそ、生で他の人たちと一緒に体験することの価値が上がってきているようすし、むしろそこにしか付加価値がないのではとも思えます。だからこそ、万博といった体験の価値が高まってきているのではないのでしょうか。

池永 確かに、ライブとかリアルということの価値が大きくなってきている。実際、映像ではないアニメの声優の声だけの朗読劇とかにも若い人が集まります。

古川 音楽の話では、僕はレコードを集めていて、蓄音機で聞いたりするんです。それで言うと、CDとかの方がむしろ中途半端。選択肢が多様であるほど、自分たちの嗜好に合わせて突き詰めていくことが可能になってきます。

池永 次の万博では、日本の文化とか伝統的なものを打ち出せばいいという意見もあります。ただ、日本文化は生活文化に入り込み一体化しているので、説明しにくい面があるのも確かです。

古川 観光でも、お定まりのルートを巡るのではなく、まちそのもの、生活を見せようという、まち歩き観光的なものが生まれてきました。だから、生活そのものを博覧会で見せることもできると思います。その内容や手法は考える必要がありますが。

あなたにとっての万博とは？

池永 先程、会場のみなさんに書いていただいた「あなたにとって万博とは？」のカードの記述によると、第五回内国勲業博覧会に実家が出店していたという方がいらっしゃいますね。

中越慈子 『浪華の魁』という明治時代の本にも実家の店の挿画が出ていますが、洋傘の製造と販売の店でした。内国博出

店のことは、知人が記録に出ていると教えてくれました。

池永 みなさんの声で、圧倒的に出てくるのが、「70年万博」のことです。「行列」「お祭り」「小さい時に見た遠い記憶」「太陽の塔」「月の石」。また、「小学校で万博音頭を踊った」「中華バイキングを初めて食べた」「7回行ったが大国のパビリオンは行かず小さなお祭りばかりを回った」、これは私と同じ(笑)。「子どもの頃の未来への夢」や「未来への扉」。でも、「大人になった時に、負債になるのではないか」とか「跡地利用の開発手法にほころびが見える」とかの記述もあります。「近未来の姿」「遠くて近い未来」「新しい発見や未知のものとの出会いや体験」「ワクワクドキドキする」「新しい時代」「新しい文化を生み出す」「時代を変える」「世界を変えることができる大装置」「次世代の人たちと共有する、未来の社会課題に対する処方箋」「これからの人間のあり方を考える場」「先代の方が我々のためにおこなってくれた大事なイベント」。

概して70年万博が強烈にイメージされている肯定的な記述が多いようすです。何より、「世界との出会い」、これが一番多かった。

山蔦 やはり万博はひとつのお祭り。実体験、生の体験が大事だと思います。文化との出会いもあるし、結局、人対人に帰結するのだと思います。普段の生活とは異なる、祝祭的なハレの部分に放り込まれたからこそ、普段気づけなかったことにも気



会場のみなさんに、あらかじめ質問カードにご記入いただきその内容を紹介しつつ議論を展開。上は「あなたにとって万博とは？」にお答えいただいたカード

がつく。日常生活からそういうところに出て行ったからこそ脳が開かれて、センサーが敏感になる。だから、そこでの出会いや発見を提供できる場をつくっていくことが大切。目先の利益ではなく、次世代に何を残さないかという、社会を変えていく力を生み出すことを2025万博には期待したいですね。

古川 資料を扱って不思議なのは、第五回の内国博に行った人の記録があまりないこと。内国博は、行くというより、どちらかという来てもらうという感じだったのでしょか。その後の博覧会には、地元の人も行っている感じですし、70年万博は、特に何度も行く人もいて、人々のなかで博覧会がちゃんと位置付けられている。ではその次の段階はどうなるのか。博覧会という場を通して、若い人たちも個人の思いや、こういうものをつくったのがどうかというような、そういうのがぶつかり合う場所になるべきだと思います。どう参加していくのかが、次の博覧会で問われているのでしょね。

池永 突然ですが、会場におられる毎日新聞社の斉藤さん、どうですか。大大阪博も復興博も毎日新聞の主催ですが。

斉藤貞三郎 大大阪博当時の社長の本山彦一は、毎日新聞を全国紙として育て上げ、中興の祖と言われた人。「サンデー毎日」や「エコノミスト」などの新聞社系の週刊誌を初めてつくりました。新聞経営の近代化を図る一方で、大阪社会事業団を設立し、また点字新聞「点字毎日」も出しています。社会事業の面でも新聞社が役割を果たすべきだと考えていたようです。大大阪博の余剰金の寄付もそうで、その頃は、大阪市ともいい関係だったのでしょ(笑)。新聞社は商売ではあるが、スポーツや文化・娯楽という面も含めて、一緒に

社会をつくっていくという姿勢は常にあったのだと思います。

古川 実は、大阪というのは大メディア王国だったのですね。大阪毎日新聞と大阪朝日新聞が全国を制覇していくわけです。そういうメディアが持っていた都市への役割。まちとメディアの関わりということも非常に大切な観点だと思われます。

「大阪・関西」であることの意味を考えたい

池永 まずは、2025年万博の名前になぜ「関西」が入っているのかが疑問(笑)。

古川 大人の事情でしょうが、大阪は関西でないのかという話(笑)。私個人的には、「関西」という言葉にさほどアイデンティティを感じない。古からの言い方だと「畿内」「関東」はあっても「関西」はないだろう。「上方」の方がまだいい。

池永 同感です。関西という言い方は明治以降～大正時代から出てくるもの。あえて使うのなら、関西という呼び方が持っている意味を考えてみる場としないといけな。今日は、そういう観点から「大阪・関西」を使っていくことにします。

さて、ナレッジキャピタルの「2025 大阪・関西万博会議～ワイガヤサロン～」では、大阪・関西で住む者、働く者、学んでいる者が集い、2025大阪・関西万博への想いを語りあっています。

大阪・関西で万博を開くにあたり、そこには日本的なるものを生みだすにつけてきた大阪・関西の風土で開催するとことの「必然性」を埋めこむことが大切。それから、大阪・関西で生まれ、住み、学び、働く私たちが肌感覚と感性と経験で、その「必然性」をもとに現代と未来の人々・社会に向けて発信することでないといけなと考えました。大阪は、現代および未来も、「交流し、混じりあう都市」「つつみこむ都市」「学びあう都市」「想像し、創造する都市」であり続けたいという思いです。

2025年の万国博覧会は、「史上 No.1の万博」にしたい

池永 そこで、まず2025万博は「史上 No.1の万博」

にしたいということを議論の出発点にすることになりました。それは、史上 No.1の知が集まる万博であり、世界初の「どこでもだれでも参加」できる万博、技術と社会を結びつけ「新たな文化」に挑む万博であるべきではないか。つまりは「超万博」。この観点から、史上 No. 1の万博「超万博」とは何かについて皆で考え、その議論のまとめをしました(次の表参照)。

- ①超「技術」×超「感性」
— 人間とはなにか
- ②超「時間」×超「場所」— 世界はひとつ・世界をひろげる「時空間」
- ③超「交流」×超「混合」— 世界から「日本」にきたいと思う「理由」
- ④超「万博」— これまでの万博の常識を超える「つながりあう万博」
- ⑤「大阪・関西2025」を象徴して、ずっと生き続けるシンボル

⑤のシンボルについては、これまでの万博、内国博に関連して、エッフェル塔があり、平安神宮、通天閣、そして太陽の塔などが残されています。そこで「大阪・関西2025」を象徴して、ずっと生き続けるシンボルづくりでは、例えば「(仮称)アマテラスタワー」を生駒山あたりにつくる。大阪平野のどこからでも見える。これは日本的なるものを生み出し続けた大阪・関西を象徴する「日本の聖地」に万博のシンボルをつくるという考えです。

導き出したのは「2025 ふところ万博 寛容な社会の実現」

池永 山蔦さんも加わった、「2025 大阪・関西万博会議～ワイガヤサロン～」での議論をご紹介します。

山蔦 幅広いバックグラウンドをもつナレッジサロン会員が集まり議論し、最終的にまとめたものを先日、経済産業省に行き報告してきました。

テーマは「史上 NO.1の万博」で、全5回開催。毎回20～30名が参加しました。

まず前提としては、「場としての必然性」(大阪・関西・日本の強み・特徴を活かす)、次に「機会としての必然性」(万博という機会を活かす)、さらに「多様な人の来阪」「予算」「世界からの注目」「新技術」などを踏まえながら、できればということで「ナレッジキャピタルとの関連性」をまじえて議論しました。

「実現したら社会はどう良くなる?」、「誰のどんな課題が解決する?」、「ここから生まれる新しいライフスタイル・ビジネススタイル・ソーシャルスタイルは?」、こういう観点からアイデアを練りました。

ここで留意したのは、一過性のイベントではなく、その後の都市戦略・産業戦略に活かすということ。そのために2025年までの期間をどう使うべきなのかということでした。

これらをもとにした議論から導き出したコンセプトは、「2025 ふところ万博 寛容な社会の実現」というものです。

世界中の多様な情報・文化が交流し、融合し、混じり合っって新しい価値を生み出してきた大阪・関西の器(懐の深さ)が今こそ必要だと考えました。

かつては「お天道様が見ている」「人様に迷惑をかけてはいけない」で十分通用した部分もあった社会でしたが、それがいまや一部の人に拡大解釈されて偏狭な考え方が強まっている面も否めません。インバウンドの急激な増加、世代間の価値観変化、社会の格差の拡大などにより、これまでの不文律やマナーが通用しなくなっているところもあります。

とにかく、日本に寛容性を取り戻すということ。これが重要だと思います。文化都市としての関西は、異なる文化の本質を読み解き、それらを交流、融合、混じり合わせることで、洗練した新しい価値を生み出す力をもっていました。それが「寛容性」です。異なるもの・新たなものを積極的に受け入れてきた大阪・関西の風土。国や文化の垣根を超えて、新しいものを許容する気質。この万博を契機に、再び寛容性を取り戻し、豊かな社会の実現を目指す、というものです。

キーワードは「他者交流」「共体験」「挑戦」

山蔦 寛容性を取り戻すためのコンテンツとしては、3つのキーワードを考えました。まず「他者交流」、自分以外の多様な考えを持つ人と交流する。次に「共体験」、自分とは全く違った性質を持つ人と一つのことをつくりあげたり、体験したりする。そして「挑戦」、既存のルールやタブーを超えていく。この3つをもって、みんなの心の中に寛容性が醸成されてくるのではないかと

と期待しています。

その具体的なコンテンツについては、ほんとうにいろいろと考えることができるのですが、例えば次の表にあるようなことをあげることができます。

◆「他者交流」では、
＜交わりの記録＞ 簡易計測キットを使い、自分のDNAからルーツを探ることができる。会場内に人類の系統樹の巨大アートが展示され、自分がどこから来てどこに向かうのか、全人類のつながりを体感できるなど。
＜全否定の万博＞ アーティストやアニメーターによって、現状の先にある「ひどい未来」を表現した作品を提示。物質的、視覚的な世界観の現状に明るい未来がない(=全否定)ことを示し、逆説的に日本の「見えないものを見る感性」「他に寄り添う心」の重要性を伝える。

◆「共体験」では、
＜言葉の館＞ 日本語以外では解釈が難しい言葉の意味・世界観を直感的に理解可能な仮想現実で体験できる。これにより日本観光をより深く満喫できる。
＜気の館＞ 古くから八百万の神を信仰し、自然界のあらゆるものに神を見、種子から芽を出し植物が育つところに「氣」を感じる文化を持つ日本人の感性を、五感を刺激する体験型アートでパピリオン内に美しく表現。テクノロジーでなんでも可視化する現代で、見えないものに思いを馳せ、大切に日本文化の発信。その重要性を再発見する。

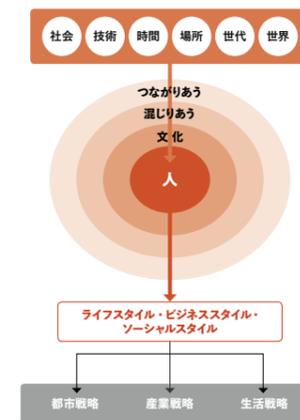
◆「挑戦」では、
＜オブジェクトに憑依＞ 会場の植木・ベンチ、装飾やロボットなどにカメラやセンサーを搭載。参加者はネットワークを通して中に入り込むことができる。会場を訪れなくても、インタラクティブな体験ができる。
＜時間ロスゼロ＞ 各パピリオンの混雑状況発信はもちろん、来場者の感じるストレス、期待度、感動や興奮などのデータもセンシングし可視化。会場内の事故発生を未然に防ぎ、運営・誘導の改善のためにデータを活用し、全ての来場者にとってストレスフリーな万博を目指す。

結論としては、万博を通して、みな寛容性を取り戻して、人間らしく生きることができると期待しています。

次の世代に何を伝えていくのか

池永 会場に来られている、ナレッジキャピタルの稗方次長、補足があれば。

「交流」と「混合」から生まれる新たなスタイル



稗方直己 ナレッジキャピタルも多様なバックグラウンドを持つ人たちが集まって、交流することで新しい価値を創造しようという施設。今回の議論は、古からの大阪にある、いろいろな文化を吸収して、自分たちの文化にしていって本質のような部分を、テクノロジーオリエンテッドなところから想起されるものを通じてアップデートさせる、またそれが、こういう万博の後にちゃんと残るようなことができないのかというものだったと思います。企業人・経営者・大学教員・学生・行政職員・デザイナー・アーティストなど、多彩な人材が集まり議論を通して出した結果ですね。

池永 もうひとり、会議のメンバーで、科学技術分野のクリエイターたちを率いておられるズームスの保田さんがいらっやいますが、どうでしょう。

保田充彦 先ほど、博覧会が楽しかったことしか覚えていないというお話がありました。例えば、僕は子どもの頃には怪獣が出てくる面白い番組としてみていたウルトラマンのシリーズで、確かキングジョーが出てきて大阪の万博会場で大暴れるというのがありましたが、こういう昔の特撮物のなかには、社会の矛盾や問題がいっぱい出てくるものがありました。差別や公害、そういった社会問題が根底にあって、子どもたちもそれに知らず知らずに気づいていった。同じ様なかたちで、表向きは楽しいコンテンツで、次の世代に自分たちが問題に感じていること、こうあってほしいという思いを伝えていけないかと思っています。私は航空宇宙工学をやっています。それは、やはりアポロが月に行って、月の石を持ち帰った。そういうことに子どもの頃から憧れたわけです。子ども

に対する影響、次の世代をつくるということは、大人が真剣にやっていることを見せるのが一番。

古川 「大阪」、「寛容」というのはすごく納得が行くところ、ただ寛容なまちは他にもいっぱいあります。発信の面では、大阪はメディア大国。朝ドラも半期は大阪制作。その発信力がある大阪で万博を開催する、年齢とかは関係なく新しいものをチャレンジする。ただメディアで宣伝するというのではなく、それも含みこんで、どうこの都市をつくっていくのか、それを踏まえて考えていくことが大切。「ふところ」で捉えた上でいかに表現していくのか。それが次のステップとして重要だと思います。

池永 先日、万博関連イベントでパネラーをされていた、EXPO (万博) マニア・収集家の二神さんは、いかがですか。

二神 敦 私も70年万博に行けなかった口です。上海には何度も通ったし、これまで150の博覧会に行きました。でもうちの両親は、そんな博覧会に100や200行っても70年を見てないと意味がないと言います(笑)。だから2025万博はすごく楽しみ。ミラノの万博で日本館に入るのに8時間も並んでいる人たちを見たときに、日本という国に魅力を感じている人が海外にそんなにも大勢いることに感激しました。そんな日本で開かれる万博にとっても期待しています。

2030年の社会に思いを馳せながら2025を考える

池永 会場のみなさんに書いていただいた「2030年はどんな時代になってほしいか」を紹介させていただきます。圧倒的に多かったのが「平和」。次に多いのが「環境」。これを守っていききたい。さらに、「言語的バリアがなくなって、世界の人々がコミュニケーションを取れる」「つながって一つになる」「全ての国、民族、人々がそれぞれの文化を認めつつ一つになっていくのがいい」というもの。おそらく数年後、今の自動翻訳がもっと簡易なものになると、自分の言葉をベースにつながっていける。そうなる、途轍もないことが起こるのではないかと、私も期待しています。さらに、「日本的感覚がテクノロジーに溶け込むような時代になってほしい」「笑顔で暮らせる時代」「子どもが誇れる大阪であってほしい」。また、「多

様性の尊重」「便利よりも優しい社会に」。「東京中心からの脱皮」「新しい未来をどうつくっていくのが課題」などです。山蔦さんはどうですか。

山蔦 やはり、第一は世界で戦争がなくなること。環境問題では、若いグレタ・トゥーンベリさんの国連でのプレゼンテーションのように、「何もしないで若者に全部背負わせて…」に共感します。とは言っても世代間の対立ではなく、また、もう年寄りだから関係ないでもなく、それぞれが取り組むべきこととして捉えるべき。2030年、AI等の発達によって、日常の雑多なことはAIに任せて、労力と時間は本質的なところに割く時代になるでしょう。ほんとうにしないといけないところに向き合っ、個人の可能性が最大限発揮されていく社会になっていくのがいい。自分もぜひそうしていきたい。

古川 大阪・関西万博ですが、これがもし東京圏で開催されるならば、どうだったか。実際、横浜も名乗りを上げていました。だからこそ大阪で開催してよかったということがちゃんと提示されることが必要です。でも、なるほど関西的やなあ、大阪的やなあというものは一体何かということが問題です。確かにふところの深さというのは、オモテナシじゃないけれど大阪的ではあるかもしれない。ただ、今は一人でも発信できるし、ボーダレスな時代。だからこそ、「万博ノー」と否定的に捉えるのではなく、あくまでもツールなので、ポジティブに捉えるべきでしょう。万博が終われば、それでおしまいではなく、みんな考えていくことが大切。それをきっかけにして、継続的に都市問題の解決やまちづくりに向かっていくこと、さらに次のステップにつなげていくこと、2025は、そのために開催する万博であるべきだと思います。

村井秀行 私が7歳のときに大阪万博が開催されました。その25年後、万博会場跡施設で4年間勤めました。そのときの実感ですが、道路などは突貫工事だったのか、あちこちびび割れが見られ、震災の時には水道管も破裂。環境面ではやはり問題があるように思えました。大きな事業である限り、影の部分も出てくるでしょう。万博に反対だというわけではないのですが、何かを壊し、新しく始めるのなら、後世につながるものを生み出すべき。禍

根を残さず、生み出した価値がより大きくなっていくような仕組みづくりをしっかりとやっていただきたい。例えば、今年4回目を迎えた瀬戸内国際芸術祭はある意味で理想的なカタチで続いていると思います。会期はあるが、やってない期間も、ボランティアの活動や地域づくりは、ずっと続いています。

池永 そうですね。単に万博を2025年に開催するだけでなく、それ以降も、もともと描いたグランドデザインのなかで何を実行するかが重要。単なるイベントではなくて、都市戦略、産業戦略、経済戦略の一貫であるべきだと思います。東京一極集中、大阪の地盤沈下が言われて久しいですが、近年大阪は、もっとも外国の人が訪れるまちであるし、ある調査では住みたいまち世界3位にも選ばれました。大きな変化がおこりはじめています。

古川 私は結構楽しみです。後の世の『大阪市史』にちゃんと位置付けられるように、後世に誇れるようなものに我々がしていきたいなと思います。

山蔦 工学部の機械工学専攻なので、エンジニアとして、世の中に役立つものを生み出し、活用していくことをやっていきたい。今日は改めて、まちづくりや文化づくりという視点からも、自分のなかでいろいろ考える機会を得ました。エンジニアも文化や社会をつくる、その一端を担う存在として自覚が必要なのだと思います。

池永 次世代にどうつなげていくのかなど、課題はまだまだ多いのが実際のところ。こうやって、みんなが平場で対等に話せる場づくりを今後も続けていきたいですね。みなさんとともに、我が事としてこの議論を続けていきたい。みなさん「2025大阪・関西万博」時代に向けて、自らができることをしましょう。今日はありがとうございました。



「私たちが考える万博」を情報誌CEL (大阪ガスエネルギー・文化研究所発行)で連載中です。



連載 第2回 (123号、2019年11月)

<http://www.og-cel.jp/about/index.html>